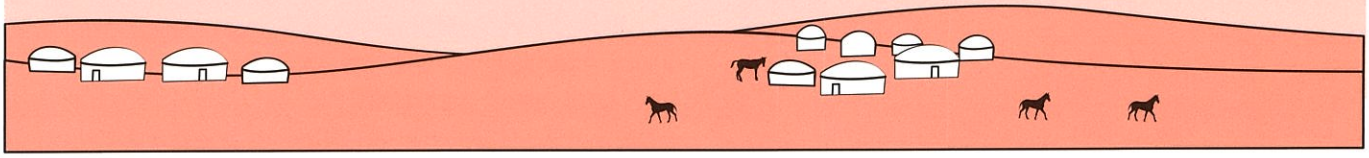
NPO法人子どもセンター「パオ」ニュースレター　発行:子どもセンター「パオ」事務局　発行日：2010年 3月20日

NPO法人
子どもセンター パオ

NewsLetter

vol.13

シェルター「丘のいえ」だより⑩ ●
公開講演会「声なき声を聴くために」リポート ●
教えて！ぱおぞうさん ●



パオの現在

シェルター「丘のいえ」だより ⑩

丘のいえの「おうちごはん」

今、パオで活動している私たち弁護士たちが、その子に初めて会ったのは彼女が中学生のときでした。家庭内でいっぱいいっぱいつらい思いをして、養護施設に入った彼女は、それでも頑張って高校に入学し、無事、高校を卒業して就職しました。養護施設も出てひとり暮らしをはじめました。けれども、あまりに頑張りすぎてしんどくなり、とうとう入院することになりました。

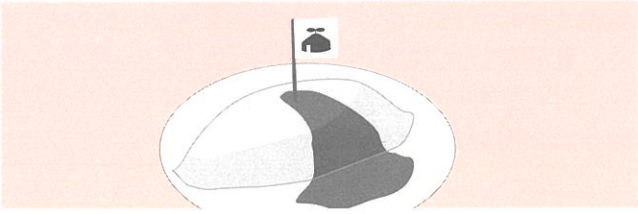
そんな彼女の「丘のいえ」との出会いは、入院先の病院に入れるようになるまでの数日間の入所が最初でした。本当に短期間でしたが、シェルターのスタッフさんの優しさや家庭的な雰囲気に、「おうちみたい」と感想を述べていました。

入院後、彼女は病院で、これからどうやって生きていこうか、いろいろ模索しながら生活してきました。ただ、ときどきしんどくなると、「パオに帰りたい」と私たちにＳＯＳを送ってくるのです。中学生のときから養護施設で育ってきた彼女は、「10人以下で食事をする」ことが、これまでほとんどなかったそうです。もちろん私たち弁護士と２人や３人で外食に行くことは何度もありました。けれども、少数での「おうちごはん」の記憶は、彼女にはほとんどないようなのです。

そんな彼女の楽しみは、「丘のいえ」での食事と調理です。お姉さんのようなスタッフと、時には入所しているほかの女の子も一緒に、食卓を囲み、テレビを見て他愛ない話をしながら食べる「おうちごはん」は、彼女にとってはかけがえのない時間のようです。また食事やおやつづくりのための材料を近くのスーパーに一緒に買いに行き、スタッフたちと台所に立つ時間もとても楽しみな時間です。

彼女は、病院がしんどくなると、外泊許可をとって「丘のいえ」に帰ってきます。そして、私たちには当たり前に思える、買い物や、調理や、「おうちごはん」で癒され、羽根を休めて、また病院に戻るのです。

「丘のいえ」の台所で、彼女の大好物のオムライスを作る弁護士の姿をとてもうれしそうに、じっと見ていることもありました。反対に、長年にわたって彼女を支援している弁護士にプレゼントするバレンタインデーのお菓子づくりのため、「丘のいえ」の台所に立つこともありました。生まれて初めてバーゲンで自分の好きな洋服を選び、「丘のいえ」に持ち帰って披露してもくれました。甘えたいときなどは、支援している弁護士やスタッフを「パパ」「ママ」と呼んだりしていました。「丘のいえ」は、彼女にとっては、疲れた時に帰ることのできる「実家」なのです。

ただ「丘のいえ」の定員は限られているため、緊急でシェルターを利用する必要がある子が複数人いる場合もあり、必ずしも彼女が望むときに、お泊まりができるわけではありません。将来の見えない不安に、時には押しつぶされそうになりながら、何とか頑張っている彼女と接するたびに、パオも、「シェルター」だけでなく、社会と彼女をつなぐ次の行き先＝自立援助ホームや子どもたちの自立を援助していけるグループホームが持てるといいなあと、心から思います。そのためには子どもたちが社会において生活できる物理的な場所と資金が必要です！

皆様からも引き続き、ぜひ、ご支援とご協力をお願い致します。（弁護士・Ｆ）